



妹まい

嫁ヨメ

M Y Y O M E

立ち読み版

小説 大熊狸喜 挿絵 Tro

プロローグ 明日から始まる夏休み

第一章 初めましての妹たち

第二章 四人の生活

第三章 またまたお嫁さん審査

第四章 花火大会

第五章 屋上でお洗濯とか

第六章 プライベートビーチの告白

第七章 残された日々を

エピローグ 新学期

006

013

025

058

094

126

159

191

252

## 登場人物紹介

Characters



あさかわ ひな  
**朝川 陽奈**

ポニーテールが特徴的な、優しく明るい、家庭的な女の子。家事が得意で、昇輝の役に立ちたいと思っている。何も無いところで転んだり、ドジな一面も。



ゆうみ つきか  
**夕海 月華**

ツインテールの金髪が特徴の元気っ娘。実害のないイタズラで困らせるが、彼女なりの愛情表現の裏返しでもある。見かけによらず、成績は優秀。



うしみつやま せいり  
**丑三山 星流**

キリッとした外見に似合わず、人見知りや激しい恥ずかしがり屋。料理も勉強も苦手なので、せめて命がけで昇輝を護ろうと本気で思っている。

てんくうじ しょうき  
**天空寺 昇輝**

大富豪「天空寺財閥」の一人息子で、派手な名前とは裏腹に地味な性格。女性に対してはかなり鈍感。

「あつ、うん。そういう事だよ、きつと！」

月華が星流に振ると、黒髪少女も恥ずかしげに、コクンと頷く。

三人の様子をうかがっていた少年に、タオルを巻き直した妹たちは改めて、揃って跪いた。向かって左に星流、真ん中に陽奈、右側に月華。

「あ、あのね、お兄ちゃん……」

これでお別れです。とか言われるのかと思っていたら、金髪ツインの少女が言葉を繋ぐ。「みんなで、その……してあげる！」

「こ、これもつ、つ妻たる者の、勤めに御座りまする！」

武士よろしく傳かみく妹の言葉に、やっぱり意味が解らない。ペニスを立たせたままの昇輝が戸惑っていると、バスタオルの少女たちから意外な事実が聞かされた。

「あたしたちね、ここ四年くらいの夏休み、みんなでキャンプ場で集まってたんだ」

西日本の山にある天空寺家所有のキャンプ場で、妹たちはそれぞれの母と、昇輝の両親との合計八人で、キャンプを楽しんでいたらしい。

言われて思い出したけど、昇輝はもう五年くらい、キャンプなんて行ってない。

「それで、でござりまする、兄上どの……その、兄上どののお父上様と母上様と、私たちの母が、その……」

真つ赤になつて言葉に詰まった星流に代わつて、陽奈が続ける。

「ママたちがね、よく夜中にみんなでこうして、仲良くしてたの」

「え……それってつまり……」

要約すると、両親揃って愛人たちとキャンプで五Pしてた。という事だ。

（お、親父もおふくろも何やってんだ……）

なんだか頭が痛い話。しかし妹たちは、それが愛の行為だと認識している様子でもある。

「だからお兄さま、あたしたちも、だ、大好きなお兄さまに……♡」

言いながら、三人は昇輝の脚を大きく開く。内股に触れた細い指が、初めての体験だと告白するかのようになり、小さく震えていた。

女の子たちの上気する顔が近づくと、恥ずかしさと同時にペニスがビクンと、更に堅さを増してゆく。

「あ、兄上どの……」

昇輝のペニスはビシッと天を向いてそそり立ち、ビクっビクっとならぶ脈動している。

未経験だけど太くて長い男性器は、全体が綺麗なピンク色。表面は太い血管が幾筋も走り、亀頭も完全露出を果たしていた。

初めて目撃したらしい三人も、恐る恐るだけ目が離せないという、遠慮がちな視線で見つめている。きっと父たちの行為を見た時も、男性器はハッキリと見えなかったのかも知れない。

「えっと……そのまま置いてね、お兄ちゃん」

そして数センチと間近にまで顔を寄せた二人は、恥ずかしそうに視線を泳がせながら、小さく声を合わせる。

「せ、せくの……！」

妹たちの唇が、一斉にペニスの裏側へと触れた。

——つちゅ……。

「んうっ——っ！」

唇が触れた瞬間、亀頭から本体、腰の奥を甘電に走り抜けられる。更に脊髄までもがビクッと痺れ、堅い肉がピンンッと跳ねた。

「ひゃっ——動いた、お兄さま！」

「お、お兄ちゃん、気持ちいい？」

驚きながらも聞いてくる妹たちの目は、とても真剣。だから昇輝も、恥ずかしさを堪えて真面目に答えた。

「う、うん。三人のキス、すごく嬉しいし気持ちいいよ」

「……………兄上どの」

正直な言葉に、黒髪少女たちは嬉しそうに瞳を潤ませる。そして喜びは恥ずかしさを超えるモノなのか、三人は更に勃起へと奉仕を始めた。

「は、早いモノ勝ちだよっ……あ、あたしは、ココを……!」

明るく言いながら、実は緊張を隠せない月華。右側から亀頭にキスをくれると、赤い充血肉に濡れた舌を這わせる。

「お兄さま……ペロ……」

——ペろ、ペろ……ちゅぶちゅ。

躊躇いを隠せない舌が震えている。くすぐられるような触れ方は、ジワリとした焦れつたい感触をペニスにくれた。

金髪少女の舌奉仕を見ながら、真ん中に位置する陽奈。長い勃起の本体を、下から上まで暖かい舌の先で、戸惑いながらも丁寧に舐め上げてくる。

「それじゃ陽奈は……ペロ、ちゅる……男の人のつて、熱くて、すっごく堅いんだね」

——さりさりさり……ペろ、ペろぬる。

裏側には、敏感な神経が集まっている箇所がある。その為か、ユックリとした上下摩擦で勃起から腰の奥までが撫でられるような、不思議な快感。

そして星流は、向かって左側に跪く。本体の上面から根元、更に睾丸袋までを、思いきった様子で舌をいっぱいに使って、愛撫してくれる。

「んん、レロリ……し、舌が、痺れます……でも、イヤでは……ペロ、んむちゅ……」  
舌の面で舐め上げられると、男性器の肌が舌のザラつきでサリサリと焦らされる。更に

高い肉カリ部分の後ろ側を擦られると、腰の奥がギュッと締まるような性感。

——れるぬりゆる……ぶちゅぶちゅるぶ。

肉棒の根元を舐められると、まるでペニス全体が包まれたような暖かさを感じる。更に袋を舌愛撫されると、背筋が甘く感じて睾丸がヒクンッと持ち上がった。

妹たちの同時の舌愛撫は、男性器の全てを一緒に愛撫される気持ちよさ。

更に、三人揃って瞳を濡れ蕩かしての、跪いての舌奉仕姿。自分の勃起を、拙くも愛しように舐める少女たちの姿態は、視覚的な強い快感もくれていた。

みんながくれる快感で、肉体は射精に意識を集中しようと、無意識にまぶたが閉じそうになる。勃起肉は小刻みに震えて、先端からは先走りの透明液がトロロッと溢れていた。

「んん……苦いけど……なんだか美味しい、お兄さま」

同じくガマン液を舐める陽奈と星流も、苦そうなのに幸せそうな、不思議な笑顔。

「みんな……すごく、気持ちいいよ……！」

そんな感想が思わず漏れて、愛しい妹たちの髪を無意識に撫でていた。

「あ、兄上どの……」

優しい髪撫でをされた少女たちは、蕩けた瞳を更に嬉しそうに濡れて輝かせて、安心したように、更なる愛情を奉仕に込め始める。

「陽奈たちで、いっぱい気持ちよくなってね、お兄ちゃん」

「お兄さまのココ、もつとしろつて言ってるよ。ワガママさんだね、ちゅ♡」

月華の龟头舐めが、陽奈の裏愛撫が、星流の袋しゃぶり、揃って速度を上げてきた。

昇輝を想ってくれているからなのだろう。三人は少年のドコがより敏感なのか、舌で覚え始めたようだ。

浴室の湿気で汗が流れる。同時に肉体は、性感で熱が冷えてゆく感覚。ツルツルの汗とは違う、シットリと粘性を纏った三人の唾液が、勃起本体を幾筋も濡らした。

龟头部分の鈴口が濡れ舌で左右から舐められて、裏側の敏感な箇所が集中愛撫に晒される。寧ろ袋の付け根の両脇が舌責めにされて、袋を唇で甘噛みされた。

——ぺろぺろちゅっ、さりすりりっしゆるちゆるっ、るちゅっちゆるちゅぶっ、れろれろかぶん。

「ぐくっ——ぜ、全部が痺れる、感じっ……!」

鈴口を舐める舌先がちよつとでも尿道に触れると、勃起全体がビリリっと感じる。裏側の弱点を責められ続けると、腰の奥へと性感が突き抜けて、更に焦らされ続ける感覚。

根元を舌愛撫されて袋を甘く含まれると、くすぐったさと優しい刺激が重なって、腰全体が射精への力を溜められてゆく。

三人の愛撫で、勃起肉の芯が性感でジリジリと痺れさせられる。腰の奥に射精の爆発力を圧縮されながら、背筋がビリリとした連続の強い快感で灼かれ続けていた。

昇輝の腕も力んで椅子を掴み、下腹部や背中中の筋肉も力を溜めてゆく。腰の奥が性感で絞られるような感覚に圧迫されると、射精の瞬間は確実に、もう目の前。

(このままだと、出て……三人の顔に……！)

強まってゆく放出欲求の中で、そんな理性が僅かに顔を覗かせる。

「みんな、それ以上されると……顔に、かかる……！」

そう告げると、恥ずかしさに頬を染めた少女たちは、優しい笑顔で答えてくれた。

「うん、いいよ、お兄ちゃん」

「わ、私たちの、顔に……！」

「思いつきにかけて、お兄さま」

快感の為に薄くしか開けていられない視界で、妹たちが微笑んでいる。

そして、月華の舌先で鈴口を強く押され、陽奈の舌で弱点をザラりと舐め上げられて、星流の唇で袋の真ん中をチュッと吸われた、その瞬間。

——つつぷるちゅっ！

「っ——んぐっ!!」

ペニスから腰の奥に向かって火花が走り、腰の奥の爆薬は一瞬で爆発。昇輝は初めて、女の子の奉仕で絶頂した。

「でっ出るっ！」



強く閉じたまぶたの奥が、眩しくフラッシュ。背筋が丸まり全身に力が籠もって、数瞬だけ痙攣。下腹部が強力むと同時に、妹たちの顔面へと、大量の精液を発射した。

——つびゆぶゆるるつどぶびゆううううつ、どぷりゆつびゆくりゆううつ!!

跪く三人の顔めがけて、白い粘液が満遍なく放射される。月華のツリ目や頬、高い鼻筋に、白濁液が太く垂れつく。

——ばしゃしゃつびしゆぶしやつ、どろり……。

「んわっ、お兄さまったら……こんなに、いっぱい……♡」

陽奈の細い眉や額や唇にも、粘性の強い精液が粘りかけられる。

——つぶちやばしやつどろりとぶつ、ばしゃぼたり……。

「きゃんぷ、んば……すぐく熱いんだね、お兄ちゃん」

星流の黒髪や目尻、細い鼻やあごのラインが、初めての男性粘液を浴びせられる。

——ぴしゃああつばしやつ、どろりとろ、ぼたり……。

「お、兄上さまの……御液が……私の顔に……あふ……」

顔射をされながら、星流も月華も陽奈も、放心したようにペニスを見つめている。

瞳をウツトリと蕩けさせた愛顔は、白濁を顔にかけられたショックと、それ以上に幸せそうな、女性特有の不思議で魅惑的な表情を浮かべていた。

「はあ、はあ……あ、ごめん……！」

快感から降りてきた昇輝は、思わず三人の顔に付着した精液を、自分の手で拭ってあげる。精液なんていつもは触らないのに、なぜか今日は汚いと感じなかった。

少年の行為に対し、妹たちは跪いたまま、素直に媚顔を向けて、気持ちよさそうに目を閉じている。

(三人とも……可愛い)

みんなの顔を綺麗にすると、いつもよりほんの少しだけ、大人っぽい色香が漂っている気がした。

そして陽奈が、優しく触れる昇輝の掌に、嬉しそうに上気した頬を乗せる。

「……やっぱりお兄ちゃん、優しい」

その言葉は三人の想いだったのか、星流も月華も赤くなって、頷いていた。

「それで、お兄さま。『お嫁さん審査大会・お風呂編』は、誰が優勝？」

言われて思い出した。しかし本音で言えば、みんな愛おしい。

「ゆ、優勝とかじゃないだろうな。みんなすぐ頑張ってくれたし」

「うーん、確かにそうかも。あたしたちも三人でご奉仕しちゃったし」

少年の答えに、妹たちも納得したようだ。そして四人はそのまま、一つの湯船で身体を暖めた。

窓から入ってきた夜風が、火照った顔に涼しく感じられた――。

月華を抱えたまま部屋に戻ると、そっとソファに座らせる。水でも取ってこようかとキッチンに向かおうとしたら、少女は再び、浴衣を摘んで縋り付いてきた。

まだ怖いのかなと思ひ、そのまま隣に座って、妹の好きにさせる。少年の肩にしばらく頭を預けていた月華は、真っ赤に腫れた目のままで上目遣いに、少し弱々しく聞いてきた。「お、お兄さまは、その……あたしのイタズラ、怒らないの？」

その質問に、ちよつとだけ驚かされる。少女は少女なりに、自分のイタズラが迷惑かもしれない、と気にしている様子だ。

昇輝は素直に答える。

「月華のイタズラは……確かに驚かされるけどさ、でもちよつと楽しいかな」  
泣いた妹は、すん、と鼻をすすると、そのまま大人しく兄の言葉を聞く。

「一人暮らしだとさ、当たり前だけどイタズラとかしないだろ？ 自分にイタズラ仕掛けたって、面白くもなんともないしさ」

だから月華のイタズラは、誰かと一緒にいると実感できる、不思議な感覚だ。そしてそれは、意外と暖かいと感じているのも事実。

「ま、さつきみたいな事がないように、今後は気をつけてイタズラする事だな」  
言われた少女は、恥ずかしそうに少しだけ拗ねる。そんな表情も愛らしくて、昇輝は少しからかってみたくなった。

「それにしてもさ、なんでそんなにイタズラが好きなんだ？ しかもよく自分も引つかかっているしさ」

少女は、ぷうつと膨れる。かと思ったら僅かに逡巡して、思いきって話してくれた。

「あたし、子供の頃からママと二人暮らしで……ママはいつも忙しくて……」

昇輝の父と出会って会社の社長になってからは、以前よりも少しは時間を作ってくれるようになった母。しかしそれまでは。

「子供の頃は、パパと離婚して女手一つであたしを育てる為に、毎日朝早くから夜中まで、忙しく働きづめだったの……」

朝、目が覚めると母はもう仕事に出ていて、夜も月華が眠った後に帰ってくる。

子供心に母の苦勞を解っていたつもりだけど、やっぱり寂しい。そんな月華はいつしか、イタズラをしてでも母に自分を見て欲しいと思いはじめていた。

それがイタズラのきっかけ。少女の告白を、少年は黙って聞き続ける。

「一緒にいて欲しかったんだと思う……ママも大変だっけ解ってたけど……」

そこまで告げると、月華の瞳はまた涙を浮かせた。

昇輝が現在の一人暮らしに寂しさを感じないのは、子供の頃は両親と一緒に暮らしていたからだ。

だから少年は、自分にできる事をこの子たちにする事が、自分の役目だと思う。まだ涙

をすする妹を優しく抱き締めて、金髪ツインの頭をそつと撫でて、明るく諭す。

「俺にだったら、いくらでもイタズラしていいぞ。それに俺だけじゃない、陽奈も星流も、みんな月華が大好きなんだし、みんな月華の事を見てるし、気にしてる」

「……う、うん……」

胸の中で、恥ずかしそうな小声の妹が、コクンと頷く。

元気になって貰おうと、更にからかつてみる。

「それに俺だってさ、今の月華のパンツがグリーンだって知ってるくらい、よく見てるぞ」と明るく言うのと、胸の中の妹は真つ赤になって、プウッと膨れた。

「もつもう、お兄さまったらつ……そんなトコまで見なくていいのっ！」

自分でオッパイを見せる事よりも、下着を見られた事が恥ずかしいらしい。プンと拗ねた月華は、いつもの明るい少女に戻っていた。

昇輝の胸に頬を寄せていた妹は、何やらイタズラっぽい笑顔を見せると、下から見上げ、顔を近づけてくる。

「ね、お兄さま……あたしのパンツ、見たんだよね」

ちよつと恥ずかしそうに頬を染めて、しかし妖しい流し目で見つめてくる。

暗いリビングで月明かりに浮かぶその美顔は、花火に照らされると更に美しく、幼い妖艶さを見せていた。

(……なんか、ちょっと雰囲気が違う……)

少年の腿に美脚を重ね、向かい合わせて腰に跨がり、胸同士を密着させてくる。

左右の腿にかかる軽い体重と、少女の体温と、胸に感じる柔らかさ。女の子との初めての密着に、心臓がドキドキと高鳴ってくる。

「つ、月華……?」

さっき物置で覗けたショーツが、脳裏に蘇る。立場が逆転したように、戸惑っている昇輝の唇へと、少女はチュッと弾むキスをくれた。

「……………!」

二回目のキスだ。とか頭を過る。上体で感じる密着少女の暖かさも手伝って、股間がギユッと、急速に血を集めてゆく。

「ショーツだけでいいの? お兄さま……♡」

見つめる瞳には、戸惑いと期待の光が、濡れて輝いていた。そして少年は、思う。

(た、確かに俺も……ここ数日だけ)

妹たちと生活していて、彼女たちが可愛いと思っている。でもだからって、自分がこの少女たちと肌を重ねて良いのだろうか。そう思うと、思わず視線を逸らしてしまう。

初めてに対する戸惑いもある。そんな逡巡を、月華は別の思いと感じたらしい。

「えっと……胸小さいの、お兄さま……いや……?」

恥ずかしそうに言いながら、月華は自ら浴衣の前を摘んで、そつと開こうとする。しかし細い指が震えて、開けずに止まってしまふ。

妹が自分のコンプレックスと必死に闘っているのは、昇輝の為だ。そう思うと、イタズラ少女がとても健気だと感じる。だから少年は、強く思う。

「む、胸のサイズとか気にしてないし、月華はいつだって可愛いじゃんか」

そんな言葉が自然に出ていた。そしてもう一つ、思っている事。

「たださ、俺はまだ、その……誰をお嫁さんにするとか、決めてないし……」

今、誰かと肌を重ねるのは不誠実なのではないか。とも、真面目に考えていた。

そんな兄の本音を聞かされた妹からは、ほうっ安心した空気が感じられる。

「お兄さま……あたしも、お兄さま……だ、だい、すき……それに今は、お嫁さん審査大会とか、そういうんじゃないモン……」

潤む瞳を向けながら、必死に言葉を絞り出していた。

(こ、ここまで言わせたんだから、後は俺が……)

緊張しながらそう決心をして、震える肩に緊張の両掌を添える。額に優しくキスをする  
と、唇が触れた瞬間、月華は小さく「んっ……」と息を吐いた

(月華も、緊張してるんだ……)

自分と同じで、こういう行為自体も初めてなのだろう。そう思うと、少年の本能は優し

くしてあげたいと感じて、心にも少しだけ余裕が出てくる。

「な、はだけた浴衣って、どのくらいエッチなんだ？」

耳元で囁きながら、ヒマワリ柄の浴衣を摘んで、スルリと開く。

「きゃっ——おお兄さま、突然だよー」

さっきの拗ね顔を見せるものの、恥ずかしそうに俯いてもいる。柔らかい浴衣がハラリと開いて、白い肩や、乳房を包む薄いグリーンのブラが露出された。

更に背中へと手を潜り込ませると、スベスベの肌が指に触れる。

「おっお兄さまっ——くく、くすぐったひ……わひゃっ！」

背中での感触に身悶えしながら、少年の浴衣をキュッと摘んで、まさぐる指に耐えている少女。そんな怯える姿にも、男の本能は性興奮を高め、更にペニスを硬化させる。

ブラのホックを探りあててプチンと外すと、お椀を伏せたように形の良い、Bカップの双乳が露わになった。

「やん……って、前にも見せたけど……！」

恥ずかしさを誤魔化すように、笑顔だけど困り顔。乳房は丸い形で張りを見せていて、白い肌と相まってとても綺麗だ。

先端の小さな乳首は明るい桃色。しかし昇輝の視線を感じてか、少しずつ赤みを増しながら、プクンと硬化を始めてもいた。

剥き出しの肩と上気した鎖骨周辺、バストも露出していて、脱ぎかけの浴衣はとてもセクシー。

「月華の胸、すごく綺麗だよな」

「そ、そう……えへへ」

恥ずかしそうに微笑む表情が、特別大きな花火で照らされると、腰の上のお尻がモゾモゾと、小さくうごめいた。

ズボンの膨らみがショーツの前面に押されると、少女の媚熱が伝わってくる。同時にツインテールの妹も、兄の興奮を感じたようだ。

「ひゃっ——お兄さま……こくん……あ、当たってる……！」

驚きながらも、その感触に濡れた息を飲んでいる。ズボン越しでも解るほど、少女の秘所も熱を帯び始めていた。

（い、いいんだよな……！）

そう自己確認をしながら、はだけた細い脇腹を抱き寄せる。胸に顔を近づけて、頬を柔らかい乳房に触れさせると、昇輝は導かれるように、小さな媚突を唇に含んだ。

「ちゅ……」

「はひっ——ひゃああん……お、お兄さまあ……！」

初めて、女の子の胸にキスをしている。興奮しながら、ドコか冷静に自分を認識してい



る部分もあつた。

(お、女の子のオッパイって……柔らかくて暖かいんだな)

唇で軽く挟むと、少女の肢体がヒクンッと跳ねる。自分と月華の心臓が、一緒にトクトクと鼓動を早めてゆく。

オレンジみたいな良い香りの肌に、薄く汗が浮き始める。フェロモンで鼻腔を刺激されると、更に股間は堅くなり、昇輝は無意識に乳首を甘噛みしていた。

「おっお兄さま、そんなにしちやつ——っあうんっ！」

軽く噛んで、舌で転がした途端、少女の身体が小さく仰け反る。更に、片手をお尻へと伸ばして、ショーツの上から指先で撫でると、下半身全体が切なそうにくねられた。

「やつ、お兄さまっ——お尻なでちやヤんっ……胸も、優しく噛んじやつ……！」

身体の力が抜けてきたのか、月華の両腕は、向き合う兄の首を弱々しい力で抱き締めて、しがみついている。

唇を離すと、少女の乳首は唾液で艶を見せていて、赤みを強めて堅く硬化しているのがよく解つた。

暖かい下腹部に視線を落とすと、浴衣から露出した内股にも、シットリと汗を纏っている。薄いショーツに隠された女の子の合わせ目も、布を張り付かせていた。

(やっぱり見たい！)

首に抱きつかせたまま、少女の腰の左右に指で触れる。ミントグリーンのショーツを摘むと、ゆつくりと下ろしていった。

「あ……お、お兄さま……!」

少し戸惑いが見られたものの、妹少女は兄の意志に従う。少しだけお尻を持ち上げさせると、小さな下着を足下から抜いた。

ヒザの内側から腕を通して、裸の丸いお尻を抱く。パツンと張りのあるお尻に指が食い込むと同時に、少女の両足は少年の腕で、大きく開かれた。

「み、見ちゃ……ひゃん……!」

開脚という羞恥に動転しながらも、妹は脚を閉じられない。

(女の子のアソコだ……!)

月華の割れ目は、少年との触れ合いで上気していて、薄く蜜にまみれていた。

普段は閉じられている柔肉は左右に開かれ、昇輝の視線を感じると、更にクチュリと粘膜を見せてくれる。

小さな肉色の真珠は濡れた頭を覗かせていて、恥ずかしさからか、小さく震えていた。左右の髪は薄くて綺麗で、シットリと濡れて羽根を開く。

狭い粘膜は柔らかそうにシワを見せていて、小さな尿口とすぐ下の膣孔が、キツく締まって蜜に濡れている。

逸らした瞳が濡れている。どうやら、いつも活発なイタズラ金髪少女は「告白させられるプレイ」に弱いらしい。

「お……お兄さまの、こ、こんなおつきな、釣り竿で……つ釣り上げて、欲しい……かも……あうう……！」

男性器を握りながら、目をつむって告白。恥ずかしさマックスで答えた妹に、昇輝はご褒美をあげる。

「よく言えたね、いい娘だ」

「ううう……お兄さまのイジワル……うそ、ごめんなさい……」

恥ずかしくて混乱しているらしい。少年は月華を横寝にすると、大きく開脚させてペニス突き込んだ。

——つつぷりゅつ！

「っひやあああああつ——いきなり、おくまでえつ……！」

熱い膣壁はすぐに勃起に絡みついて、無数の粒々で愛撫をくれる。告白プレイで飢餓感を強められていた少女は、挿入だけで絶頂寸前にまで追い詰められたようだ。

「はうんつ——お兄さまああんつ……太くて、熱ひいっ——そのまま、月華を釣り上げてへええつ……！」

全身の力が抜けながら、腰も脚も震わせて、昇輝の抽送を望む妹。求められた少年は、

すぐに激しい腰突きを開始した。

「すぐに釣り上げてやるぞ、エッチなお魚さん。それっ！」

——つつぷづぷりゅぢゅつ、づぶづぶぬるりゅつぷつぷつ、りゆるぶぢゅぶぢゅぶつ！  
「あひやうううつ——お、おにいさまはああつ……おくがズンズンつてつ、コヒがカクカクひちやふうううつ……つ！」

絶頂寸前の女体を激しく突かれ、月華は柔らかく肢体をくねらせる。開脚させられた脚を力なく揺らしながら、指は必死に船底を掴もうとする。

「月華の中もつ……熱くて、すぐく締める……つ！」

連続で突く少年も、熱くヌメる膣壁の締め付けで、ペニスの弱点が強く愛撫される。肉傘の裏や本体の根元がツブツブで擦られて、腰の奥で爆発力が溜められてゆく。

横寝姿勢の乳房を揉み上げ、掌の中で乳首を転がす。もう片手は剥き出しのお尻を撫でながら、熱い後孔をツンと突つつく。

「あひゃんんつ——おおにいさまはつ、おひり突ひちやつ——んきゅんんつ——やらあぁんんつ……！」

軽く突く度に肛門はキュッと収縮して、尿口と膣壁も一緒に締まる。激しい腰打ちにポルトが揺れて、小さな波を跳ねさせていた。

周りの音が、耳の奥で小さく感じる。全身の熱が勃起に集まる感覚は、もう絶頂が近い



そして昇輝は、月華の子宮に向かって精を放つ。

——つどぶゆ

——つつ、びゆくびゆ

——つ、

どぶゆつびゆくびゆくんっ!!

「あんっ——またおにいさまの、ひゃんっ……おなか、やけどひちやふよう……あん……」  
熱くて強い粘液で子宮壁を叩かれたフィッシュマンな少女は、紅葉に染まった肌をヒクんと跳ねさせて、頂点へと釣り上げられた全身をクツタリと脱力させていた。

そんな数日を過ごしていたある夜。昇輝が自室のベッドで、妹たちと撮った写真を両親宛にメールしていると、突然三人が悲鳴を上げながら飛び込んできた。

「「きゃあああああああああああああああつっ!!」」

「うわあっ——どどっどどっどどっどどっど!!」

心臓が飛び出るかと思うくらい、驚かされた。妹たちにしがみつかれた兄は、そのまま押しつぶされる。

抱きついたまま震える、三人の髪を撫でながら、優しく事情を問う。陽奈や月華はともかく、冷静な星流まで、昇輝の胸に顔を埋めていた。

「どうしたんだ、三人とも。何か怖いモノでも見たのか？」  
胸の上の少女たちが恐る恐る顔を上げると、三人とも涙目で怯えていた。最初に答えた

のは、陽奈。

「キキ、キッチンで……あ明日の、ご飯の下拵えを、しししていたら……がが、蛾が飛んできたの……！」

そういえば料理大好きな妹は、虫が大の苦手だと、つい先日言っていたのを思い出した。涙目少女の髪を撫でながら、今度は金髪の妹に視線を向ける。

「あっ、あたし気をつけてるのにつ、ホラー映画のコマーシャル、見ちゃったようっ！」  
月華がホラー嫌いなのは、屋上の一件で知っていた。しかしどうやら、CMも見えないように普段から気をつけていたようだ。

そして、初めて泣き顔を見せた黒髪の妹。ペソをかいているそんな美顔も、かなり美人で可愛い、とか思ってしまった。

「わ、私は、その……とと、遠くの山で、雷がっ——ひいっ！」  
言ってる途中で確かに、遙か遠くの方で、ゴロと鳴った。

つまり三人とも、同時に嫌いなものと遭遇してしまった、という事だ。

「あはは……それは怖い思いをしたな」

言いながら、妹たちの頭を撫でる。こうして頼られると、男の心は正直に嬉しい。

胸の上で震える少女たちの小さな重みは、昇輝にとって護るべき、とても大切なもののように感じられた。

四人でいられる時間は、もうすぐ終わる。そんなタイムリミットが迫っているのだと、改めて自覚してしまうと、本音が溢れた。

「ずっと、こうして四人でいられたらいいのにな……」

「「えっ——!?!」」

少年の言葉に、妹たちはハッと頭を上げる。その表情は、驚きと恥ずかしさとそれ以上の喜びで、複雑に上気していた。

「あ、あの、お兄ちゃん……」

「あ、あたし、たちも……」

「あ、兄上さまと……その……」

顔中を真っ赤にして、言葉にならない言葉を告げようとする妹たち。どうやら三人の意思は、昇輝と同じだったらしい。

「み、みんな……」

少女たちの告白に、少年は深い喜びを覚えた。そして同時に、四人でいたいと、更に強く思う。

妹たちは恥ずかしそうに、告白を続ける。

「でもね、もしお兄ちゃんに迷惑だったらって、思うと……」

「わ、私たちは、ガマンをしなければ……」

「だから、その、ホントはね……あたしたち、い、いつもどうしようって、焦って……」  
そこまで言った途端、せきをきったように三人は泣き出してしまった。

「わああああああああんんっ！」

縫り付いて泣く妹たちが、この上なく愛おしい。少年は少女たちが泣き止むまで、黙って抱き締めてあげていた。

「な、今日はみんなで、一緒に寝ようか」

いっぱい泣いた三人が落ち着くと、昇輝は多数のシーツやクッションを持ち出す。四人で広いリビングに降りると、クッションとシーツを敷いて、みんな横になった。

「わあ、ホントにキャンプって感じ？」

ロウソクの小さな明かりだけのリビングで、好きなようにゴロゴロ。四人は自然に互いの手を取ると、順番に口づけをかわした。

「お兄さま……ちゅ」

「あ、兄上さま……ちゅ」

「お兄ちゃん……ぶちゅ」

柔らかいキスを貰うと、昇輝のペニスも妹たちを求めて血を集める。少女たちがシャツや袴をはだけると、小さな明かりの中で、艶々の肌が照らし出された。

月華の微乳が艶めき、陽奈の豊乳が弾み、星流の巨乳がプルンと揺れる。黒髪の妹が二

人の少女に促されて、少年の胸に。

「あ……みんな……兄上さま……」

少しだけ戸惑う侍少女の額にキスをすると、昇輝は妹と上下に重なった。仰向け少女の爆乳は全く自重に負けず、丸いプリンのように形を保っている。

はだけた道着の半裸姿でシーツに転がる星流に、二人の妹が左右から、乳房への愛撫を始めた。向かって左が月華で、右が陽奈。

「やっぱり星流はおつきいなあ。羨ましい」

「それに形も綺麗だし。ぷるんぷるん」

妹たちの愛撫を、昇輝はヒザ立ちになつて身を起こして、眺めて楽しむ。

左右の乳房が二人の少女に揉み上げられて、柔らかくこね愛撫される。兄の目の前で乳房揉みをされるのは、黒髪の妹にとっては恥ずかしい事のようなだ。

「あひゃつ——あ、陽奈さんそんなっ……つ、月華さんも、そんなにしたら、あん……！」  
目の前で、二人の少女に爆乳を揉まれる侍少女の姿は、結構エロティックだ。どこかレズプレイっぽくも見えて、若い男性器は更にドクンつと堅くなる。

（なんか……姉妹でこういうプレイ、みたいな感じ）

両腕をクッションで押さえられた星流は、剥き出しの巨乳を持ち上げられて揉まれ、先端の乳首までをしぼるように愛撫される。

「はあ、んうっ……胸が、熱い……さ、先はっ——あはう……転がさ、ないで……はあん……」

パン生地のようにタツプリと揉み上げられると、Fカップ爆乳は仄かに上気。

「星流ちゃんの胸、重〜い」

左乳房を両掌でこね揉みながら、重さと柔らかさを楽しんでる陽奈。先端の媚突を指で転がしたり、不意に唇で甘噛みしたりすると、爆乳少女の肌がヒクッと揺れた。

右の乳房脂肪を、根元から先端に向かってしぼる月華も、頬を染めながら羨ましそうな視線を乳房に向ける。

「女のあたしでも、触ってて楽しいんだもん。おつきいっていいなあ」

言いながら、上半身を寄せて、自らの乳首を星流の硬化した先端に擦り合わせた。

「ひゃんっ——っ、月華さんっそんなっ……こ、コロコロ、しないで……!」

乳首愛撫は、黒髪少女と金髪少女、二人の官能を強くくすぐられるらしい。桃色の媚突同士が転がる度に、星流の細い背中がキュっとしなり、月華のまぶたがトロンと蕩ける。

「あん……星流を責めてるのに……はあ……あたしも、なんだか……」

そして妹たちは乳肌全体を優しくしぼり上げると、プクンと硬化した媚突を、しゃぶりやすいように少年へと向けてきた。

「もう堅くなってるな、ちゅ……」



「んひゃつ——あ、あにうえ、さまぁん……」

左右を一緒に含むと、星流の肢体がヒクンつと跳ねる。唇と舌でコリコリと転がすと、白い女体は艶めかしくくねられた。

「ああにう、えさまは……はんっ……そんな、コロコロうっ——はふ、ふんく……ど、どふか、もつとっ——あう……!」

初めて欲求を口にしてしまった少女は、強烈な羞恥に全身を染めて、キュっと目を閉じている。

「星流ちゃん、ダイタンだね」

「うん。素直な星流は、可愛いよ」

大きなお尻を撫でながら、二つの乳首を甘く噛む。兄の愛撫に、黒髪少女は切なそうに女体を震わせながら、性感の中で脱力してゆく。

汗を纏った肌に指を這わせながら、脇下から細いウエストを撫でて、広がる女腰にタッチ。純白のショーツに指をかけると、そのままスルりと足下へ。

「あうっ……あ、兄上さま……」

羞恥に閉じられたヒザはしかし、全く力が入らない様子。昇輝が軽く押しただけで、美脚は肩幅よりも広く開いた。

星流の秘所は既に十分な蜜を含み、赤い粘膜を開きかけて、兄の肉棒を欲している。

少年が自分でジッパを開こうとしたら、二人の妹が手伝ってくれた。

「お兄さま、あたしたちが……」

「わぁ、お兄ちゃん、すっごく堅い」

前を開けて勃起を露出させた二人も、肉の存在に圧倒される。頬を染めて羞恥しながら、ガチガチにそそり立つペニスに、マジマジと魅入っていた。

二人の掌を添えられて、赤く硬化する熱棒を濡れる女孔に宛てがう。敏感な濡れ粘膜をツンと突くと、汗を纏った星流の肢体は、魚のようにしなやかに跳ねた。

「んひややつ——あ、あにうえさまの……はああ……あつい、ですう……」

恥ずかしいのに、腰が勝手にくねって上体がしなる妹。大きな双乳がタプンと揺れて、触れるペニスは、先端部分が蜜に濡れた。

「今、あげるよ」

ゆっくりと腰を進めると、熱くて柔軟な膣孔へと、勃起が突き込まれてゆく。鈴口が肉壁の中へと沈み、亀頭部分が飲み込まれて、本体が挿入されてゆく。

「んくふつ——あ……あにうえさまが……お、おくへ……はああ……」

肢体を反らし巨乳を震わせながら、黒髪の妹は兄の勃起を、完全挿入で受け入れる。

根元まで押し込むと、先端は少し堅い子宮の入り口に、ツンと当たった。軽いタッチだけで、少女の女体はまた、蕩けるようにくねられる。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)



全国書店で  
好評発売中

凄腕退魔士の咲妃を  
牝奴隷に堕とす  
新たな敵の登場!

「小説・蒼井村正 / 挿絵・或正せねか」

呪詛喰らい師2



全国書店で  
好評発売中

少女天使の暴走が  
平和な学園生活を破壊する!!  
シリーズ急展開のバトル&エッチ!!

「小説・さかさ傘 / 挿絵・天海雪乃」

思春期なアダム4 聖域の崩壊



「小説・大熊狸喜 / 挿絵・大空樹」

オトミッコ! 僕は男の巫女娘

全国書店で  
好評発売中

男の子と女の子——  
二つの性の間で揺れ動く  
男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!



**既刊LINEUP**

- 仙狐字態戦姫ノブナガリ ①～③
- ビルグリムメイトン ①～③
- 不死の吸血鬼がTSのご主人様を募集しているよです

全国書店で好評発売中

- 思春期なアダム ①～④
- 呪詛喰らい師【カースイーター】
- 女幹部メル様のカセイ征服計画!
- 借金お嬢小姐 ①～④
- 無敵の姫騎士がDMMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!  
来かねる場合がございます。い場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!